大学と連動する初等・中等教育のあり方に関する研究

小林　正二

(受領日：2013 年 5月2日)

高知工科大学教育講師室
〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口 185

E-mail:kobayashi.shoji@kochi-tech.ac.jp

要約：大学生の多様化に起因する諸問題のうち、最も深刻な問題は然したる目的もなく義務教育感覚で大学に進学して来た学生の扱いである。筆者は、この問題解消の処方箋について、本学の教育講師生活 2 年間を通じて研究してきた。そこで分かったことは、本学が、今展開している初年次教育としてのスダディスキルズや 2 年次以降のキャリア教育を再考・改善していくことは大学の責任を果たす上で勿論必要なことではあるが、それ以上に小学校、中学校、高校と連携しながら「大学と連動する教育」のあり方を探っていくことが本来の大学の役割（使命）である学問の高度化を目指す上でも、社会に貢献して行く上でも必要不可欠だとの認識に至った。H25 年度はこのような考えにもとづいて、本学のキャリア教育に携わる一方、小学校・中学校・高校への訪問授業も積極的に取り入れて行きたい。

1. 緒言

この春で、大学の教員となって 3 年目を迎える。この間大学では、初年次教育としてのスダディスキルズや 2 年次以降のキャリア教育を担当しながら、大学全入時代の象徴的な現象である「学生の多様化」に関わる諸問題の処方箋を研究してきた。

筆者は、大学生が学び舎を巣立った後、社会人として自立し、豊かな人生を送って行くにはどうしたらよいか、という認識の下に大学での初年次教育を含めたキャリア教育というものを考え、授業を実施している。授業では特に、社会人として時代の変化に棹さすだけの生き方よりも、むしろ自分の抱く“夢”の実現に向けて、時代の変化に抗する場面も想定しながら一生にわたってその実現努力を惜しまない生き方の大切さを説いている。この理由は、大学生にとっての学生生活は、夢の実現手段のプロセスの一つであることを理解し、豊かな人生を送る基本条件だと認識してもらうことにある。

したがって、“夢”が実現するか否か、つまり、社会に出てから自立して豊かな人生を送れるか否かは、大学生活を戦略的に送ることができるかどうかにかかっている。学生生活を戦略的に送ることができた学生は、学生生活で学んだことを足掛かりに、社会に出てからも“夢”の実現に努力していける基盤を持ったことになる。よって、“夢”は大学で勉強していくためも、社会人として自立していくためにも必要である。“夢”を実現していく構想力こそが戦略的な学生生活を送る基本条件となる。

今、前述したように人生は“夢”の実現プロセスだという考え方に立って、大学生の多様化に関わる諸問題を眺めると、大学のキャリア教育で最も必要とされることは大学生の“夢”実現構想力の貧困さを何とかしなければならないことに思い当たる。筆者は、この状況を本学紀要の第 9 巻[1] ですでに指摘したとおりであり、このことが学生の多様化の諸問題のうち最も重要で、喫緊の課題だと考えている。

そこで、大学のキャリア教育を、学生の“夢”実現の構想力を育むものだと位置づけるとその前段である小学校・中学校・高校（以下、小・中・高と称す）での学びもまた重要になってくる。今回は、本学キャリア教育のあり方（その 2）として、「大学と連動する小・中・高教育のあり方」というテーマで論じて見たい。

2. 夢の実現構想力と戦略的学生生活

キャリア教育において、大学生の多様化に関わる諸問題のうち、最も重要で喫緊の課題は、大学生の

夢実現構想力の貧困さだと指摘したが、この理由は次の通りである。ここ2年間にわたって、本学の新入生と接して気づいたことを以下に述べる。

i）多くの学生は、自分のやりたいことや夢を持って大学に入学して来る。少なくとも半数以上はこのような学生である。･･･Aタイプの学生

ii）一方、自分の“夢”とか“やりたいこと”が分からないと答える学生も少なからずいる。そういう学生はこの大学4年間で“夢”を見つけると答える。･･･Bタイプの学生

一般に、大学というところは自由で自発的な思考・行動が求められ、履修科目も自分で選択・決めなければならない。上記のAタイプの学生は、大学の自由で自発的な雰囲気に早く馴染みやすく、早くから自分の意思で思考・行動ができるようになる。

一方、Bタイプの学生は、何の目的もなしに大学に来ている訳けであるから、自由で自発的に思考・行動をするということが学生にとっては苦痛となるのである。結局、Bタイプの学生は義務教育感覚の生活から抜け出すことが難しく、選択や意思決定を先送りしてしまう傾向にある。

筆者は、大学での初年次教育やキャリア教育とは、社会人として自立し豊かな人生を送るために、既に夢を持つAタイプの学生に対しては彼らが持つ夢をさらに深掘りさせるためのものであり、また、目的もなしに大学に来たBタイプの学生に夢の大切さを早く気付かせるためのものであると考えている。実際、学びの目的を早期に認識できた学生ほど、“夢”というものの意味を理解し“夢”の実現に向かって早くから取り組んで行くことができる。何かの目的に向かうからこそ、学生は社会の動きにも関心を寄せ、戦略的な学生生活を送ろうとするのである。他方、学びの目的を認識できない学生たちは、小学校から中学校へ「ところてん式」に進んだように、中学から半ば義務教育化した高校にも安易に進学し、さらには、高校から大学への進学もまた義務教育感覚であったことを物語る。

筆者は、このような義務教育感覚から抜け出せない学生がいるという現実こそが多様化の諸問題の中でも、最も重要な課題であり、最も喫緊に解決しなければならない課題であると理解する。したがって、このような課題を放置しておくことが、ますます大学生の多様化を野放しすることにもなり、更なる大学の大衆化を招くことになると考える。学問の高度化という本来大学が果たすべき役割を阻害したり、学問を通じて社会に貢献するという理念もまた阻害されると考えている。

よって、大学での学びとは彼ら自身の夢を実現するための構想力を育み、大学生を戦略的な大学生活に向かわすよう仕向けることで、学びの質を高めることだと認識できる。大学生が戦略的な学生生活を送れるかどうかは今も昔も小・中・高からの教育の積み重ねにかかっているのである。

3. 中・高教育の実際と課題

3.1 何故、小・中・高の教育を問題にするか

前項では、大学における教育のあり方を大学生の多様化に関わる諸問題と絡めて論議した。この中で、大学で学ぶ意義を十分理解しないまま義務教育感覚で大学に進学した学生の中には決して学力が低いわけではないが、何をしたいか分からないまま偏差値で入れる大学（学科）に振り分けられたと思っている学生がいることこそが問題だと指摘したい。このことは、大学単独の問題というよりは、むしろ初等教育から蓄積されてきた問題なのである。

結局、高校から大学に進学するという時に自分の進路選択や意思決定を先送りし、学生が義務教育感覚で大学に進学できたことは、結果的に社会の成熟や価値観の多様化が、若者のモラトリアム[注1]化を経済的にも道徳的にも許容しているかのように見える。

ここで、日本の若者と外国の若者それぞれが、いつの時点で自分のキャリアビジョンを固めたか、興味深い比較データが昨秋、日本経済新聞[2]に紹介された。これを図1に示す。

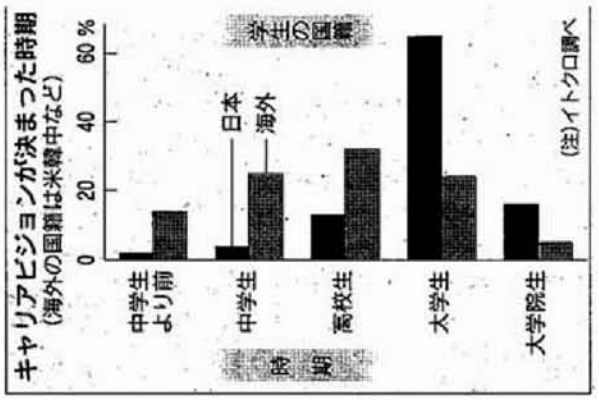

図1. 若者のキャリアビジョン決定の時期

これによれば、日本の若者は大学や大学院で80%近くがキャリアビジョンを決めるのに対し外国の

若者は大学生になるまでに 80%近くがキャリアビジョンを設定している。

また、同じく昨秋、日本経済新聞[3]には、H24年3月に大学を卒業した若者（約56万人）のうち15.5%にあたる8万6千人が就職も進学をしなかったと報じた。このうち、40%は働く意欲のない若者（ニート）であったが、60%は就職の準備をしたけれども在学中に仕事は見つからなかったとしている。このことは、日本の学生が全体的にキャリアビジョンを決めることが遅いことと無関係ではなく、日本の学生自身の就職活動に対する認識の甘さや準備不足があったことが伺える。

以上のことを踏まえると、大学入学後の学生の進路選択については当然大学がその指導責任を負うのであるが、大学進学希望者全入の時代では、若者が自らのキャリアビジョンの構想や意思決定を先のばししてきた高校側の事情も見逃すことはできないのである。

3.2 訪問授業等で見た中・高教育の実際

筆者は、大学と連動する小・中・高教育のあり方を探ろうと、本学が推進する訪問教育事業を活用して昨年初めて高知県内の中学校（小規模校）と高校（工業高校）それぞれ各一校において訪問授業を行うチャンスを得た。また、高知県内外を問わず、高校生が行う各種課題研究発表会に積極的に参加し、情報収集を行った。その概要を以下に示す。

（1）訪問授業による中・高生徒の状況

この授業では、「君の夢は何ですか」をテーマに、過去の著名な創業者や歴史上の人物の“夢”をいくつか例にとり、“夢”を持つことの大切さを若者に伝えることが目的であった。

“夢”というものは何も特別な「何か」ではなく、もとをただせば手が届きそうもない著名な人物の“夢”であっても「身近な者のために何かをしたい」という心根であったとする筆者ならではの解釈を伝えた。その心根こそが“夢”の原型であることを理解し、自分でも“夢”が持てそうだということを確信してもらう試みであった。そういう事情から、中・高とも授業の構成は敢えて同じものとした。

この訪問授業における生徒の反応がどのようなものであったかを知るために、授業から2か月ほど経ってから中・高それぞれの担当の先生にアンケート調査を行った。その結果の概要を表1に示す。

これによれば、高校では「“夢”というものを理解し、より前向きに進路を捉えるようになった」とする前向きな報告であったが、中学校からは「著名人の夢ではなく当日の講師（筆者）の夢が語られるとよかった」という“あまり関心が湧かなかった”ことを伺わせる意味合いの報告であった。

	高校（工業系）	中学校（小規模校）
①授業に対する生徒の反応	・夢に関心を持った生徒が多かった。	・（アンケートからは不明）
②授業後の反応	・夢を話題にすることもあり。 ・進路決定に自主的な動きがでた。	・（アンケートからは不明）
③自発性を促す取組状況	・個別にキャリア教育で実施。今後年間を通じた取り組みになるようキャリア教育を見直したい。	・多くの教科でフリップを用いて自発的な意見表現を促す
④大学を意識した授業	・必要。基礎・基本は大事だが、受験に際して発展的な内容まで生徒に自主的に取り組ませたい。	・必要。キャリア教育と関連している。
⑤要望等	・今後、訪問授業では、専門的な内容以外にも、勉強の意義や目標を持つ大切さを取り挙げたい。	・偉人の話は自分達でもできる。 ・先生自身の夢への取組みや大学の魅力を説明して欲しい。
⑥備考欄	・進学希望の2、3年生対象43名 ・ほぼ50%が就職、残りの50%は大学等へ進学	・1～3年生全校生徒対象33名 ・5割近くが大学等へ進学希望

表1. 中・高訪問授業のアンケート結果（概要）

同じ構成の授業で、このように生徒の反応に違いが生じた要因とは何か、そのことについて若干以下に考察する。まず、高校生に対しては“筆者”ならではの編集方針でまとめた著名人の個々の夢（客観的事象）を聴くことによって、事象間の本質的な因果関係を推論し、結論として「身近な者のために何かをしたいという心根がこそが“夢”の原型であって、これなら自分でも“夢”が持てそうだ」と理解したからではないかと考えられる。尚、中学生の反応があまり芳しくなかった要因は、中学生の事象間の因果関係を推論する力が高校生ほどには発達していなかった可能性が考えられる。

筆者にとって初めての今回の訪問授業では、自ら試みたいこともあって中・高同じ構成で授業を行ったが、今後はもっと工夫したい。例えば、訪問先中学校の先生からご指摘いただいたように、生徒が“夢”を抱くきっかけとなるならば「筆者」の“夢”にまつわる実例をも示しながら授業を展開したい。また、訪問先高校の先生からは、今後も今回のような専門分野以外の学習（勉強の意義や目的を持つ大切さなど）を訪問授業として受け入れたいとのことなので、もっと対象を広げアプローチしたい。

（2）産業教育関係学科等に学ぶ高校生の実際

高知県内の産業教育関係学科等（商業科や工業科、農業科など）に学ぶ高校生を対象に、生徒の自主的研究活動を活性化し、産業教育の振興を図る目的で高校生の課題研究発表会[注2]が行われ参加した。その概要は下記の通りである。

ｉ）発表内容は、例えば、地域の特産物に着目し、

それを用いた商品のマーケテイング活動をどうするか、あるいは、特産物を用いて新しい用途（製品）開発をどう行っていくか、といったもので、それぞれ高校生の目線で一生懸命取り組んでいた。

ii）総じて今回の課題研究発表会では、テーマに重点を置いた発表であったが、開催目的にもあるように、「地域の産業にどうかかわっていくか」、「自分の将来設計にどう影響を与えるのか」、といったことまで考察すると生徒の構想力は“より”高まったのではないかと考える。

（3）建設系教育を学ぶ高校生の実際

高知県内の建設系教育（建築科、土木科）を学ぶ高校生を対象に、様々な発表を通じ、自らの知識や考える力を養う目的で高校生の課題研究発表会[注3]が行われ参加した。その概要は下記の通りである。

i）発表内容は、例えば、近年の自然災害、とりわけ、東日本大震災の教訓を踏まえて減災をテーマに、自分たちができることを高校生の目線で一生懸命取り組んでいた。

ii）総じて今回の課題研究発表会では、前述した実業高校と同様にテーマに重点を置いた発表であったが、開催目的にもあるように、「自分の知識はどう変わったか」、「自分の考える力がどう高まったか」、「自分の将来設計にどう影響を与えるか」といったことまで考察すると生徒の将来構想は“より”アピールできたのではないかと考える。

（4）県外の普通科高校にみる生徒の実際

地方小都市の中核校であるA高校[注4]は、少子高齢化と若者の都会への流出が続く中、間もなく再編・統合される運命にある。そんなA高校理数科の年一回定例課題研究発表会[注5]に参加した。その概要は下記の通りである。

i）A高校では、“SSH指定校”の活動を基軸に地域の小・中学校や地元の大学と“連携”し「ふるさとの“意思ある学び”」[注6]という独創的な活動を同窓会と共に展開している。

ii）この課題研究発表は、地域の“意思ある学び”として、市民に開放される。地域の自然や地域社会といった身近なところに関心や興味を見出し、意欲的な調査・分析（フィールドワーク）を経て研究をまとめていた。

iii）研究内容は、例えば、化学反応を扱う研究では比較的高度な化学の専門知識が必要であったし、地域を扱う研究ではその切り口を地域と密接に関わる生物や方言、温泉土産などを取り挙げており、斬新な取り組みであった。

iv）総じて、取り組みが高度で斬新であっただけに課題も多く、特に「研究の背景」や「研究の目的」、「結果の考察」、「今後の課題」など構想力を問う部分に若干説明不足が見られた。

v）全体としては、高度で斬新なテーマに意欲的に取り組んだことは評価でき、これらの取組みは少なからず生徒の発奮材料となって、さらに大学への関心を呼ぶものと確信する。

3.3 訪問授業・課題研究発表会に見る課題

今、地方に必要とされるのは、地域の衰退という流れに抗し、真に地域の活性化を誘発するような対策である。

ところが、今回の訪問授業や高校生の課題研究発表会に参加して分かったことは、テーマに重点を置いた発表に終始しており、課題発表会の目的にもある「自分の未来の設計にどう影響を与えたか」、「研究の背景、研究の目的は何か」、「結果の考察をしたか」、「今後の課題は何か」ということにはあまり言及されていなかったことである。こういうことでは、高校生の課題研究発表そのものが知識偏重に陥り、真に地域の活力を生み出す原動力には成り得ないのではないかと危惧せざるを得ないのである。

例えば、戦後間もなく始まった我が国の農村集落を対象にした過疎対策でさえ、多くの資金を投入しながらも見るべき成果が得られなかった。それ故、もう10年、さらに10年といったように10年スパンで過疎対策を40年間も追加・継続してきたのである[4)]。それでも一向に過疎化の進展に歯止めはかからない。このような状況に陥っていることこそ、知識偏重型の教育の限界を示すもので、地域の課題解決には何ら役に立たないのである。

そんな思い通りにいかない地域の過疎対策や地域の活性化政策であっても、その言葉の裏には、一旦は進学や就職で地域外に流出（グローバル化）した若者を地域にUターン（ローカル化）して欲しいという意味が込められている。しかし、本来、グローバル化とローカル化とは相反する概念であるから、これを一緒に考えること自体矛盾するものである。しかしながら、このような意味合いを理解しつ

つ、地域活性化政策を真に有効なものと成すためには、グローバル化とローカル化という相矛盾した概念を融合せざるを得ず、そのためのメカニズムが必要となる。これまでに筆者が得た知見によれば、この矛盾を解消する方法は唯一生命の仕組み[3]に求めることができる。

今、本当に地域活性化や我が国の再生を新たなコンセプトで切り開く人材が必要となっており、そういう人材は生命の仕組み理解し地域や国の活性化のためにそれを応用でき得る人材のことである。そのためには必要な人材を育成し得る教育システムを構築・整備することが喫緊の課題となる。実際フィールドに出て、訪問教育や高校生の課題研究発表会に参加して初めてわかるのである。

3.4 知識を活かす身体化を伴う学びの意味

筆者が初めて経験した中・高の訪問授業において、人類がこれまでに獲得してきた論理的思考能力の人間個体への注入度合いは、年齢や身体の成長度合いによって左右されることを見出した。また、高校生の課題研究発表会からは、フィールドワークを伴う学びが生徒の理解力とか、自発性をより向上させている様子も伺えた。

このような体験から、人類がこれまで進化を繰り返しながら獲得してきた能力を人間個体へ注入することとは、単なる知識を学ぶのではなく、身体化を伴う学びであることをここに確認しておきたい。

身体化を伴う学びといえば、大林[注7]の人間の心性の発達（系統的発達、個体的発達）[6]を思い起こす。この心性の発達という概念を活用すると、これまで長い時間をかけて人類が狩りや農耕、出産などを通じて蓄積してきた「道具を使う、時間的順序付け、可逆的思考、情報の次元変換」などの系統的発達（社会的発達）を、子供の頃の遊びや親の手伝いを通じて「言葉の発達、直感的思考、帰納法的／演繹的思考、時間の概念や対称性の理解」などの個体的発達（個人的発達）として自然に身につけてきたと解釈できる。このメカニズムを図 2 に示す。

この図は、大林の心性の発達のメカニズム[注8]を参考に筆者が心の発達と教育との関係を考慮しながら、加筆し作成したものである。

この図を見ると、大学に目的もなしに入学して来る学生を少なからず見受けるということは、前段の小・中・高時代に人類の体系的発達が年齢相応に身体化されていない可能性を考えつく。それは、身体的には十分に発育していても、条件が整わないと論理面・精神面での体系的発達が上手く人間個体に引

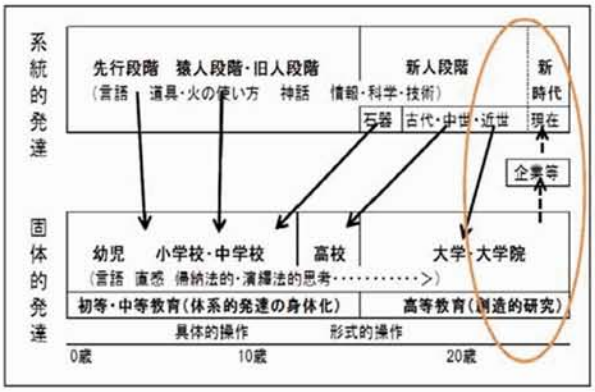

図 2. 心の発達と学校教育

き継げなかったり、発達が標準より遅れたりするということが起き得ることを意味する。つまり、生徒／学生のモラトリアム化に気が付くのである。

このことは、大学においても高度な知識・技術の開発・研究に挑戦していくには当然それまでの体系的発達は、単に知識としてだけではなく、身体化され使いこなされたものになっていなければならないことを意味している。これを比喩的に表現すれば、一度自転車の乗り方を覚えると後は意識しなくともいつでも上手に乗れるし、高度な曲芸にまでも挑戦可能となるようなものである。

中・高への訪問授業を行ったり、高校生の課題研究発表会を聴いたりして、中・高教育や大学教育が抱える共通の課題とはこういうところにあるのだと実感した次第である。

4. 初等・中等教育と高等教育との連携

4.1 意識する世界の中の日本

地域の衰退とか活性化とか地域社会に関する課題は、教育問題を抜きに語れない。教育問題は、社会の深いところで政治・経済・文化・文明・歴史と関係し合っているからである。したがって、今我々が直面する地域の衰退など文化・文明に関わる課題の解決にあたっては、教育との関わりを決して避けて通れない。ここでは、特に近世から最近世に焦点を当て、我が国の歴史観を整理しておきたい。

18 世紀後半に産業革命がヨーロッパの島国で芽生えたが、そのうねりは西洋文明として 19 世紀から 20 世紀にかけて地球を駆け巡った。それは、あたかも台風が周りを破壊しながら成長していくように、産業革命という鋭い利器を持った西洋文明という嵐が、周辺地域から若者を吸引しながら都市を育て、地球資源を大規模開発し、都市文明化し、英国→欧州→米国→日本へと伝播、今もって嵐は

BRICsを中心に吹まくる。その結果、地球環境の悪化と世界人口の急増を引き起こした。都市文明とはそんな莫大なエネルギーをもつ嵐である。

文明の嵐が通り過ぎた後の欧米諸国や我が国では、高度経済成長の時代に終わりを告げ、低成長・成熟化の時代へと質的変化をしてきたわけであるが、それでも都市への若者集中と都市機能の高度化は止まるところを知らない。そのような経緯の中で、地域の衰退や地球規模の自然破壊といった文明の負の部分が21世紀初頭に入って一段と顕在化している。つまるところ、自然軽視による過度な自然開発という付けが回ってきたとも考えられる。

そういうこともあって、これまでの自然の開発一辺倒から地球環境の持続的な利用を目指そうとする新たな国際秩序（G20）の動きも出てきたところである。しかし、西洋文明（都市文明）の享受が、地域の若者を吸引して都市が隆盛したことと引き換えに、我が国古代から続く、自然との共生を前提にした長江文明に起源をもつ日本文化[註9]が途絶えようとしている現状に危機感を募らせる人も多い。今にしてこういう意識を我々日本人がもつことこそ、我が国が古の時代から「世界の中の日本」を意識し世界の歴史の中で発展してきた証である。

あらためて、世界の中の日本を強く意識し、世界史の尺度で我が国の未来社会を洞察しなければならない世紀が到来したと考える[7)]。

4.2 我が国が抱える課題解決の糸口

古代から続く日本文化が途絶えようとしつつある実態は、地方都市の学校再編・統合問題と共通する背景を持つ。特に戦後、急激に都市文明が我が国の隅々まで普及・浸透し社会インフラが整備されたことによって、地方の価値観が都会と同等化し、古くからの風習が破られた。

このような理由から、都市周辺や地方においても都会と同様に周りの人間関係をあまり気にしなくても物質的にも社会的にも自由な生き方が可能となり、いい意味での人間関係までも維持困難に陥り人間関係が希薄化した。このようなことが、地方と都会との間に大きく立ちはだかっていた障壁を解消し、地域から人が流出し地域の減退を招いた最大の要因であると考える。

このことを、もう少し具体的に説明するならば、農業の機械化、家事の電化、上下水道・道路・鉄道の生活インフラ整備や通信インフラ整備による都市文明の享受が、高齢化した親たちの地域での生活自立を後押しし、これまでの狩りや農耕、出産という共同作業の名残としてのいわゆる“結”に代表される強くて拘束力のある古い絆を崩壊に至らせしめ、長男を含む若者を地域に止める必然性を失わせたと考えている。このような強い絆の消滅が若者を都市に出やすくしたといっても過言ではない。結局、若者の都市への流出は、大地に根付いた土着文化が都市文明に駆逐されるプロセスだと解釈できる。

このような背景の下に、我が国が抱える重要な課題を解決するための糸口を見出すには、その原因が文化と文明の戦いであることを認識し、我が国古来の文化の特性を持続的に生かせる文明を先ず選択するという方向性を見出すべきだろうと考える。つまり、西洋文明・都市文明のように人類のエネルギー源を地球のストック資源の開発一辺倒に求める文明（文明的文明）から、太陽系のフローエネルギーの活用と人類の営みの場である地球と共存を可能とする文明（文化的文明）に向けて舵を切り替える段階に来ているのだと考える。

我が国が、このような文化的文明を受け入れていくには、誰もが共有できる共通の価値観、例えば、「地球の自然を大切にする」という価値観が必要となる。その上で、自然を大切にした新たな地域社会の“絆”を形成することが、異なった価値観を持つ多様な人間が心をつなぎ留め合って“まとまり”を形成することを可能とする。ただし、絆は、物質の世界の引力と違って人間同士の間に自然に生まれるものではなく、地域に暮らす人々の“まとまり”を復活させたいという“意志”やお互いの“信頼”が重なり合ってこそ生まれるものである。

このように、地域をつなぎとめる絆は、グローバル化社会では強くて古い“協力と拘束”型の絆は似合わず、緩やかで新しい“意志と信頼”型の絆を新規に構築することが必要だと考える。これを戦略論的に表現すれば、自然を大切にするという理念・ビジョンを我が国の新たな“絆”とすべきであって、大半の国民が共鳴し合い我が国の一体感を醸成することが必要だと考える。

こういう自然を大切にする新しい型の“絆”では、地域に住んでいても都会に住んでいてもこの“絆”を共有でき、少子高齢化・総人口減少時代の「地域活性化（あるいは、我が国の再生）のためのキーワード」として後述する「人々が地域と都会を還流する」というコンセプトにつながるわけである。

したがって、我が国の文化・文明のあり方の選択に関わる問題には、我が国社会にとっての“絆”のあり方を探求していこうとする姿勢こそがその課

題解決の糸口となると考えている。

4.3 世界に貢献するための日本の要件

我が国の文化の存亡は、我が国に古代から続く文化と新しく上陸してきた西洋文明（都市文明）との戦いの行方に左右されるもので、大げさにいえば将来を担う学生の教育に我が国の将来がかかっていると認識することから始めなければならない。そういっても過言ではない。

この場合、大学生の多様化を就職難とか、モラトリアム化とか、負のイメージで捉えるのではなく、文字通り学生の多様化を社会の価値観の多様化に対応させ、正のイメージで捉えることが大切になる。そして、教育によって、我が国国民が一体的に共有できるビジョンを構築し得る人材や我が国文化の存亡を伴う文化・文明の選択を任せられるような見識とパワーを備えた人材をより多く輩出しなければならないのである。

そのためには、次に示す4つの大きな要件を獲得していかなければならない。

i）第一の要件：我が国が、文化・文明の選択を迫られるような時代背景として、我が国が高度な経済社会を構築したにもかかわらず、西洋文明に浸りきれずに常に自然を意識する我が国国民の心情は、量的に豊かな物質的文明（文明的文明）から質的に豊かな物質的文明（文化的文明）への転換を知らず知らずのうちに求めていたからではないかとさえ考えている[註10]。我々日本人自身、これに応えて行くべきだと考えている。

そのためには、来たるべき社会の姿を学生にイメージさせながら日本の将来や学生自らの役割を構想させ、世界の中の日本の役割・使命を見出し得る多くの人材を輩出させて行くことが急務であると考える。これが第一の要件である。

ii）第二の要件：我が国では戦後国民の多くが都会に出てサラリーマン化し一億総中流などといわれたように量的に豊かな物質的生活を手に入れた。そして、そのことが地域を過疎化に向かわせたり、都会でも地方でもサラリーマン化した多くの働き手が便利な生活を維持するのに男女とも仕事に就き、生活は核家族化し少子化を招くことになった。

そのころ、我が国の経済大国化と歩調を合わせるかのように新興国の台頭などもあって我が国は高度成長から成熟社会に転じざるを得なく高い経済成長は望めない状況となった。そんな状況の中で、世界における存在感を低下させることなく、我が国が生計を立てて行くには、科学技術立国としての存立基盤を確保するための若者パワーが不可欠である。結局、少子化傾向に歯止めが必要だと認識しなければならない。これが第二の要件である。

iii）第三の要件：世界における存在感を低下させることなく我が国が生計を立てて行くもう一つの道は、少子化問題と同様に、新しい価値観を創造していける若者パワーが不可欠である。そんな状況の中で、地中に高密度で存在するストックエネルギーから空間に低い密度で分布しているフローエネルギーへの転換を果たすための技術開発を起爆剤として、文化（文明）、歴史、先端科学・医療・産業・情報、政治・経済・経営、文化・芸術などの分野に新しい価値観を創出し、地球と共生し得る産業への脱皮を図っていくことが不可欠である。これが第三の要件である。

iv）第四の要件：ある意味ではこのようなエネルギー革命をリードすることが、新たな社会的価値を創造することにつながり、産業の質を変え、新たな成長要因が浮上してくるといってもよい。そんな未来の社会を構想し得る見識とパワーを持った人材を多く輩出し、世論をつくり、我が国文化の存亡を伴う文化・文明の選択を適切に行っていかなければならない。これが第四の要件である。

これら上記4つの要件を獲得していくには、大学でのキャリア教育は勿論、小・中・高の教育を通じて、モラトリアム化からの脱却を早い段階から指導するとともに、合わせて若者の多様化した正の一面を引き出していくことが重要だと考える。したがって、大学においてはモラトリアム化した学生を大急ぎで目を覚まさせることは勿論、学生全般に専門分野の学びに加えて専門分野を学ぶ意味や社会での役割分担・使命を理解させるという構想力を養う教育を徹底していかなければならない。

5. 小・中・高教育のあり方

5.1 社会につながる学校づくり

複雑な社会というものを、散逸構造としての“系”で捉えると理解しやすい。こう考えることで、学校

と社会は、フィードフォワード、フィードバックという双方向でつながり、この時の社会と学校は“系”と“サブシステム”の関係であり、学校は社会のサブシステムとして考えることができる。

ここで、生徒に着目すると、生徒は小学校という小さなサブシステムから次第に中学、高校、大学というより大きなサブシステムを経由して不可逆的に社会に至る。つまり、フィードフォワードの関係を構築する。一方、社会に出た若者は企業などいずれかのサブシステムに属し仕事をするので、他のサブシステムに影響を与える。このようにして、サブシステムである学校もまた社会から影響を受け不可逆的に変化する。つまり、フィードバックの関係を構築する。このような関係を図 3 に示す。ここで、フィードフォワードの関係はグローバル化、フィードバックはローカル化に対応していると見做すことができる。

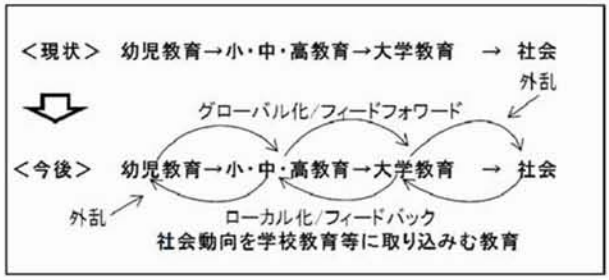

図 3. 学生の多様化への対応イメージ

このように、社会と双方向でつながる開かれた小・中・高と大学である限りは、生徒が “意思ある学び”に代表されるように社会とつながる生きた教育を受けることが可能となる。少し本題から外れるかもしれないが、そのような開かれた教育の場では、虐めや暴力は起きにくくなることは間違いない。

ただし、学校が情報開示を怠たるなど、社会から学校が閉じてしまえば虐めや暴力が蔓延することは勿論、“意思ある学び”は期待できない。教育の場は、社会に開かれたサブシステムでなければならないのである。

5.2 人材育成は高校から本格スタート

学校は基本的に開かれた場であるから、高校生が夢の実現を通じて世の中に貢献しようと考えたとすると、大学は高校と社会をつなげる媒体だといえる。そんな重要な位置にある大学ではあるが、大学生の中には、偏差値で振り分けられてその大学に入ったと思うものも少なからず存在する。しかし、大学とは学びの場の一つでしかない。したがって、入学経緯の事情は多々あろうがその大学で、今後は何を学ぶか、社会に出てから何をするか、といったことにつなげることが大切となる。

このような事情を鑑みると、人材の育成は大学になってからあわてて取り組んでも遅いと感じる。多くの若者は、地元の高校を卒業すると就職や進学で故郷を離れる。ほとんどの場合は、盆・正月に一時的に帰省することはあっても“ふるさと”にUターンするものはほとんどいない。

若者はより広い世界に憧れて、不可逆的に故郷を後にするものである。地域の衰退は、戦後の少子高齢化の影響を見過ごすわけには勿論いかないが、重要なのは若者が地域から一方的に流出していることなのである。一旦は就職や進学で故郷を離れた若者が再び故郷に還流することこそが、地域の衰退を克服する有効な道である。この概念を図 4 に示す。

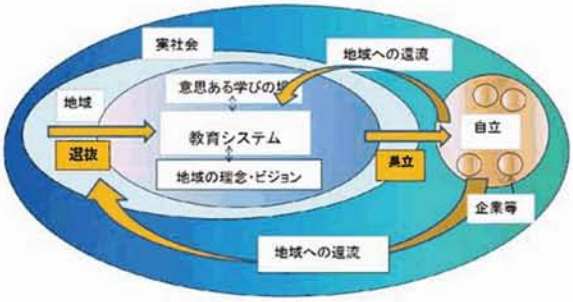

図 4. 人材還流システム（イメージ）

多くの人材が還流を開始するには、地域の理念・ビジョンが総意として大半の人々から支持される必要がある。つまり、地域市町村の首長はじめ、地域の住民、地場企業などの総意として“地域の将来ビジョン”を定めること、行政もまたビジョン実現に向けて役割を果たすことが条件なる。

このように考えてくると、地域のビジョンを構築していく上で若者の理解・協力は不可欠であって、ものごとの論理的な理解が可能となる年齢に達した高校生の段階における学びは極めて重要な役割を果たす。

人々の還流に対する認識はまだまだ低いが、地域の活力を再生する上で、高校生に対し学校は勿論のこと地域が一丸となって期待することや地域／都会間の人材還流が不可欠だといった基本的なことの教育を今すぐスタートすべきだと考える。

6.大学でのキャリア教育のあり方

6.1 本学の基本理念を大切にした教育

本学の理念は、概ね次のようなことを表している。

＜本学の理念＞

大学のあるべき姿を常に追求し、世界一流の大学を目指す。そのためには次のことを行う。

ⅰ）来たるべき社会に活躍できる人材の育成
ⅱ）世界の未来に貢献できる研究成果の創出
ⅲ）地域社会との連携と貢献

キャリア教育も本学の理念に沿った教育を目指さなければならないことは自明である。理念に沿った教育とは、何もマニュアルをつくり金太郎飴のような画一的な教育を行うことではない。

ただし、大学の理念は正当性を有するわけであるが、潜在的にグローバル化とローカル化という矛盾する二つの概念を含んでいることから、この大学の理念を追い求めて行くにはかなり努力と困難を伴うことを覚悟しなければならない。この矛盾を解消するのは前述したように生命の仕組みを大学の機構に取り入れることが必要不可欠となる。

この仕組みを考える上で一つのアイデアを提供するならば、大学に関わる全ての教職員が理念・ビジョンを一体的に共有しながら、その教員ならではの個性を十分に生かしたユニークな授業を追求していくことになろう。一言でいえば、ユニークな授業を形成するには教員一人ひとりの大学の理念・ビジョンへのベクトル合わせ（方向付け）が必要だということである。

6.2 大学のアドミッションポリシーの明確

日本の若者が減少していく中で、大学もまた小・中・高と同様に多くの課題を抱える。本学でも大学の大衆化や学生の多様化に伴う弊害をできるだけ少なくし、有望な学生を如何に獲得していくかといったことが大きな課題となる。

然るに、大学ではこのような大学としての存在感を維持するための工夫が必要になることは論を待たない。工夫の源としての本学のアドミッションポリシー[8]は、概ね次の通りである。

ⅰ）本学は、本学の基本理念（前述）に沿って、「大学のあるべき姿を常に追求し、世界一流の大学を目指す」という目標を掲げる。
ⅱ）この目標に賛同し、来たるべき社会に活躍できる人材になるという強い意志と情熱をもち、勉学意欲のあるものを求める。
ⅲ）各学群、学部それぞれの分野への高い関心と志望動機・目的意識をもち、本学で学ぶための基礎学力を有していると認められる者の入学を希望する。

大学のアドミッションポリシーは、これはこれで正当なものと考えるが、大学の理念と同様にグローバル化とローカル化という本質的に矛盾する概念を含んでいる。

したがって、この矛盾した概念を解消するためには、前述した中・高の授業や高校の課題研究発表会などでも触れたように、大学に来て欲しい人材として、前述した「ふるさとの“意思ある学び”」で実践しているようなこと、つまり、身近な自然・社会をフィールドとして経験した若者、地域の課題を共有している若者、意思決定が自らできる若者をその要件として是非とも追加したい。

その理由は、“ふるさと”とつながる若者は基本的にグローバル化とローカル化の矛盾した概念を潜在的に理解できると考えるからであって、大学の理念・ビジョンにベクトルを合わせることのできる若者として捉えることができるからである。

6.3 夢の実現構想力を育む

豊かな人生とは必ずしも物質的な量の豊かさを追求することではなく、自分の夢を実現していくという精神的な質の豊かさを追い求めることでもあると考える。むしろ、質の追及こそが成熟社会では大切だと考える。そして、質の豊かさを追求した結果、量的な豊かさも得やすくなるという社会の原則を理解してもらうことである。

したがって、少なくとも大学で実施するキャリア教育においては、就職活動の際に必要となる企業などとの仕事に対する考え方のマッチングを図るということの重要性を教え込むことが大切になる。そのような戦略的なキャリアビジョンを構想・遂行していくには戦略マターとしてのポイントがある。

ここで、キャリアビジョン構想の典型的な手順に関わるいくつかの戦略的マターを以下の通り示す。

ⅰ）自分の夢を認識
ⅱ）今の自分のポジションを把握
ⅲ）周辺の社会環境を分析、今後の動向予測
ⅳ）マイルポストを設定（Ex.大学卒業時、30歳時）
ⅴ）夢実現の構想（分野、社会貢献、役割・使命）
・社会の動向
・夢実現の要件（教養、専門性、社会ルール）
・「要件獲得と夢実現」のための手順・工程

このようにキャリアビジョンというものを考え

ると、高校時代のキャリア教育と大学のキャリア教育との大きな違いは、大学のキャリア教育は本質的に戦略的だという点である。

7. おわりに

昨今のように変化が激しいグローバル化という時代背景においては、時代変化に棹さすだけではグローバル化とローカル化の矛盾した概念の解消を諦めたに等しい。

ここは、グローバル化とローカル化の矛盾した概念の解消を図りつつ、社会の価値観を量から質へと転換し、世界に、日本（地域）の存在感を示していける大学が、若者激減の時代に生き残れる条件であろうと考える。

この意味において、若者が世界に羽ばたきながらも、減退しつつある日本社会の現実に目を向け日本（あるいは地域）の再構築に向けて興味・関心を寄せる若者、つまり、社会からグローバル化とローカル化といった相矛盾する期待をかけられながらも自らのアイデンティティを構築し得るような若者を多く輩出することこそが大学の役割であり、使命である。

このような考え方に立って、本学キャリア教育のあるべき姿について、引き続き研究して行こうと考えている。そして、最終的にはキャリア教育に関わる諸提案につなげて行きたい。

註

1　モラトリアム：モラトリアム（moratorium）は一般的な意味で用いるものとする。ここでは、最近の大学生に少なからず見られる「自分で意思決定することが苦手で意思決定を先送りしてしまうような若者」を指す。

2　H24年度　高知県高等学校産業教育　生徒研究発表会（H25.1.12）：主催・高知県教育委員会、後援・高知工科大学他，於・高知工科大学

3　H24年度　高知県建設系高校生　課題研究発表会（H25.2.4）：主催・高知県建設系教育協議会、後援・土木学会四国支部他，於・高知工業高校

4　A高校：長野県飯山北高校、現在は普通科と探究科（H24 年理数科を発展的に改組）で構成。H22年SSHに指定。前身は旧制・飯山中学校（明治36年4月創立）。H26年4月再編統合の予定。

5　A高校の理数科課題研究発表会：本発表会は、今回で14回目（H25.3.19）。市民にも公開される。今後は後継の探究科に引き継がれる。

6　A高校の「ふるさとの“意思ある学び”」：本校の探究科では、探究活動としてフィールドワークを重視し課題解決型の学習を取り入れている。同校の同窓会では、探究科が取り組むべき課題研究のテストケースとして普段の授業ではできないような地域づくりをテーマに、同校OBの大学生が夏休みを利用して行うローレル夏季大学や同校生徒も参加して行うローレル文化講座を展開している。直近の活動では、H26 年度末の北陸新幹線延伸を機会に、延伸メリットを沿線地域に活かすための「街づくり政策」という課題に取り組んだ。

7　大林：大林太良（1929-2001）、民俗学者。東京生まれ。

8　心の心性の発達のメカニズム：大林は、体系的発達、個体的発達という2つの概念で、人間の心の発達を受け継ぐ仕組みを説明する。体系的発達概念と個体的発達概念とは、文献6)を参照。

9　日本文化：日本文化は、長江文明（稲作・漁撈文明）に由来し、西洋文明はメソポタミア文明（畑作・牧畜文明）に由来する。これらについては、文献　9)、10)参照。

10　質的に豊かな生活への転換：ここでは、量的に豊かな生活から脱却して、質的に豊かな生活を目指すことになるので、質的に豊かな生活を目指す国家戦略は、少なくとも成長という文字は削除し、質的に豊かなというイメージを出すために、新たな国家戦略として高度化戦略と称したい。具体的な中身は今後詰めていきたい。

文献

1) 小林正二，“本学基本理念につながるキャリア教育に向けて”，高知工科大学紀要第9巻第1号，pp.177-184，2012年7月
2) 日本経済新聞，H24.10.7，19面“「新卒ニート3万人」の背景　”
3) 日本経済新聞，　H24.10.8，22面“将来像決めた時期 海外早く”
4) 参院調査室，“過疎対策の現状と課題”，立法と調査No300，p19，2010年1月
5) 清水　博，生命を捉えなおす，2008年11月増補版9版
6) 大林太良，“図-1 人間の心性の系統的発達段階と個体的発達の対応図”，心の中の宇宙，pp.48-49，

1996 年 10 月
7) 宮崎市定，“世界史からみた日本の夜明け”，“日本史と世界との関連”，“世界史からみた日本の黎明”，宮崎市定全集 21 日本古代，pp.221-228，pp. 329-422，1993 年
8) 高知工科大学，“大学の理念”，“アドミションポリシー”，平成 25 年度学生便覧，p.1，H25 年 4 月
9) 梅原　猛・安田喜憲,長江文明の探求，2004 年
10)安田喜憲，龍の文明・太陽の文明，2001 年

(Regular Paper)

The Study on States of Elementary and Secondary Education Connected with University Education.

Shoji Kobayashi

(Received: May 2th, 2013)

Educational Lecturers' Office, Kochi University of Technology
185 Tosayamadacho- Miyanokuchi, Kami, Kochi, 782-8502, JAPAN

E-mail: kobayashi.shoji @kochi-tech.ac.jp

Abstract: Among the problems concerned with the diversification of student's characters, the most serious problem is education for students who entered the university without their own purpose and with same sense as high school days. The author studied about prescription to resolve these problems during two years from the view point of an Educational Lecturer. It was also necessary to improve our own educational programs, for example, the Study-Skills and the Carrier-Educations. However,－attitude to realize cooperative education with elementary, junior-high and high school is more important, in order to take high level education and contribute to community. So the author will try to realize cooperation with elementary, junior-high and high school. Furthermore, visiting lecture for elementaey, junior-high and high school will be promoted.－